



100年前のパンデミック

6月10日発売

日本のキリスト教はスペイン風邪とどう向き合ったか

富坂キリスト教センター編

【新教コイノーニア36】

◆A5判・190頁・定価1650円

歴史の欠落を埋める貴重な共同研究！

スペイン風邪は、当時の日本人の4割以上が感染し、45万人が死亡した大惨事だった。しかし、従来キリスト教史の中ではほとんど言及されてこなかった。そうした研究状況を踏まえ、本書は、(1)各教派や学校の機関紙類、また教界の指導的人物の日記を徹底的に読み込み、当時のキリスト者が、スペイン風邪についてどのように考えていたのか、また教会としてどのような取り組みをしていたのかを探る、(2)巻末に当時の資料からの詳細な抜粋一覧を付す、(3)感染症対策の専門家である東京都看護協会危機管理室アドバイザーを務める堀成美氏の5編のコラムを付す、など工夫をこらした。



新教コイノーニア36

100年前のパンデミック

日本のキリスト教はスペイン風邪とどう向き合ったか

富坂キリスト教センター編

【編集】
神田健次 戒能信生 堀成美 三好千春 李元重 辻直人 熊田凡子 上中栄

【目次より】

神田健次 まえがき

戒能信生 スペイン風邪と日本の教会

——各教派の機関紙などに見るスペイン風邪の記録から

三好千春 スペイン風邪と日本カトリック教会

——カトリック系逐次刊行物史料を中心に

李元重 スペイン風邪と日本組合基督教会

辻直人 キリスト教学校とスペイン風邪

熊田凡子 日本のキリスト教幼児教育の実態と影響

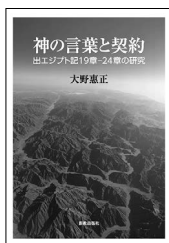
——JKU年報の記録を中心に

上中栄 スペイン風邪と再臨運動

戒能信生 キリスト者の日記に見るスペイン風邪

各教派の機関紙等に見るスペイン風邪の記録

● 3 月刊行



神の言葉と契約

出エジプト記 19 章—24 章の研究

大野恵正著

モーセ五書の中心問題（神顕現、十戒、契約の書、そして神と民の契約）を記す基層資料が、申命記主義者によって信仰文書としての高みへと決定的に引き上げられ、さらにヤハウィスト、祭司資料編集者によって現在の形に整えられていく消息を明らかにした労作。◆ A5 判・定価 6050 円

● 2 月刊行

ヒップホップ・アナムネーシス

ラップミュージックの救済

山下壮起・二木信編

気鋭の執筆陣の論考・小説や、BLM 運動と共闘する黒人牧師の説教、日本で活躍する 6 名のラッパーのインタビューなどを収録し、ヒップホップが歌う現実と救済を示した待望のアンソロジー。



◆ A5 変型判・定価 2750 円

● 1 月刊行



ジーザス・イン・デイズニールランド

ポストモダンの宗教、消費主義、テクノロジー

デイヴィッド・ライアン著／大畑凜、小泉空、芳賀達彦、渡辺翔平訳

世俗化論の想定に反して多様な宗教実践が開花しているポストモダン社会。監視社会論の泰斗がその謎と新たな宗教の可能性に迫る。現代を生きる信仰とは？

◆四六判・定価 3850 円

● 1 月刊行

カール・バルト研究

絶対的逆説を指さす神学

宇都宮輝夫

◆ A5 判・定価 3960 円

聖書解釈学という切り口から見えてくるもの、弁証法やアナロジーを通して浮かび上がる福音理解、神学史家としての慧眼の秘密など、半世紀に及ぶ研究の総決算。



関田寛雄著

目はかすまず、気力は失せず【仮題】

1977年のヨハネ福音書1章の講解説教から、一昨年のキリスト教学校人権教育セミナーでのアブラハムの生涯に関する主題講演まで、40余年の間に語られた48編の講演・論説・説教。著者を牧会者・説教者・神学者として生かしてきた福音の核心を余すところなく伝える。 四六判・予価2530円

奥田知志著

コロナ禍で聖書を読む【仮題】

2020年のイースター礼拝から始まった「コロナ禍で聖書を読む」連続説教YouTubeで配信され大きな反響を呼んだ15回の説教を収録。人々の間を分断する大きな壁に、福音の言葉が穴を穿つ。 四六判・予価2310円

ジャン・カルヴァン著／堀江知己訳

テモテ・テトス・フィレモン書

牧会書簡（テモテ・IIとテトス）およびフィレモン書の註解を収める。いずれも1550年前後の作品。長老や監督などの初代教会の教職に関するカルヴァンの驚くほど自由な読み解きが興味深い。 A5判・予価4500円

ジャン・カルヴァン著／森川甫訳

共観福音書註解 下

マタイ・マルカ・ルカの三福音書を対観しながら記された註解書。福音書の「調和」を見出そうとする改革者の情熱。上巻の刊行から36年ぶりの邦訳完結となる。 A5判・予価8500円

● 5月に出た本と雑誌

正教の道

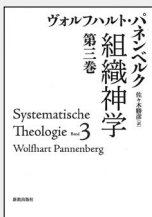
キリスト教正統の信仰と生き方
主教カリストス・ウエア著／松島雄一訳



現代人への信仰案内として今や定番の書籍、待望の邦訳。正教の立場からキリスト教の核心を簡潔に説き、古代教父、現代の著作家、正教の祈禱文などから豊富に引用、いのちの道・祈りの道としての信仰を明らかにする。 ◆四六判・定価2530円

組織神学 第三巻

ヴォルフハルト・パネンベルク著／佐々木勝彦訳



パネンベルクの名著『組織神学』全三巻（一九八八―一九三年）は長らく邦訳が待たれていたが、ここについに刊行開始。第三巻は終末論的賜物としての霊に関する教理という大きな枠組みのなかで、教会論を徹底的に展開する。 ◆A5判・定価13200円

福音と世界

6月号 「死」をいかに語りうるか

◆定価6600円

寄稿者・美馬達哉、天田城介、竹信三恵子、立岩真也、安田真由子、柴崎聰／根本敬、清水知子／田崎英明、勝村弘也、有住航、栗田隆子、金迅野、好井裕明、辻学

●新型コロナウイルスのワクチン接種が急速に——遅すぎるとの声も聞きますが、新技術を用いたワクチンの長期的な影響が未知であることを忘れるわけにはいきません——進められています。東京オリンピックへの政府や企業の強い意志が、その背後にあるのは疑いありません。いっぽう、オリンピック反対の声の高まりが報じられています。二〇一三年に東京が開催地に決まって以来、歓迎ムード一色のなかで再開発が進められてきたことを考えると隔世の感すらありますが、同時にどこか既視感も覚えます。二〇〇八年に民主党政権が成立したとき、それまでメディアでほとんど取り上げられることのない話題に躍り出ました。朝のニュースですら移設を疑問視する声を報じる状況にいくばくかの期待を覚えたのですが、その後の顛末はいうまでもありません（だからこそ、今も続く現場の行動には本当に頭が下がります）。抵抗がメディアで流通する情報に還元され、規定路線を強化する機能すらもつてしまう、まさに「スペクタクル」（ドゥボール）というべき状況でどうすればいいのか。小社ではちょうど一年前に『現代のパベルの塔——反オリンピック・反万博』とい

う本を出しました。その特色は、時流にやらない反対の声が詰め込まれている点にあるでしょう。スペクタクルのなかで賛否の勢力図を塗り替えようとするのではなく、あくまでオリンピックそのものを撃つための随一の手がかり（担当編集として、ここは自信をもって言いたいです）である同書を、いまこそ手に取っていただけるとうれしいです。（堀）

●五月末に小社の株主総会が開かれ、二〇二〇年度の営業結果を報告しました。幸い黒字決算でしたが、内容は決して良くありません。売上は前期と比較して八パーセントの減少。黒字化したのは、政府のコロナ対策である持続化給付金と雇用調整助成金によるところが大きいです。ところが今年度は、持続化給付金はなく、雇用調整助成金も六月で終了することになっていきます。多くの会社がいよいよ苦しい舵取りを強いられるでしょう。後者の助成金は雇用と直結しますから、とりわけ非正規で働いている人たちの生活をいっそう不安定にすることが予想されます。パンデミック下でオリンピック型の経済政策は政策技術としても稚拙です。いま必要なのは中小零細企業とそこで働く人々たちを守るための長期的で広い範囲にわたる骨太な施策だと思えます。（小林）

福音と世界

2021年
7

A5判・80頁・定価660円・送料70円
年間予約購読料（送料共）8760円

特集・精神と権力

自由意志の罪と罰——小泉義之

ロンブローソの「犯罪者」研究と千年王国

運動——松田博

アスペルガーと「うつ」のしるし——自閉症、

博識な当事者／親族、自己改善——渡辺翔平

クリップ・マッド・反社会性——辰己一輝

危機と狂気といたましさを——松本麻里

社会の「コミュニケーション障害」から——高橋淳敏・渡邊太

——「自己自治へ」——

【書評】ヘレン・ジェファソン・レンスキー

『オリンピックという名の虚構』 白井一美

【注目の連載】

◆ 間隙を思考する 非同時代性のために 4……田崎英明

◆ 福音のフラグメント 4……有住航

◆ 古代イスラエル文学史序説 5……勝村弘也

◆ 霊性のエロジーあるいはアマミテリア 6村澤真保呂

◆ 「Say a Little Prayer」開かれる世界 16……栗田隆子

◆ 今を生きることは 16……金迅野

◆ 新約釈義 第三テーマ書 16……辻 学

◆ くまさんのシネマめぐり 19……好井裕明

◆ 教父学入門 22……土井健司